

(5) 小豆  
(ア) 病害

病害虫名及び 防除時期	防除方法及び注意事項
各種病害 (立枯病等)  は種前	耕種的防除 1. 種子は厳選し、無病種子を使用する。 2. 輪作を行い、ほ場の清潔に努める。 薬剤防除 1. 種子粉衣
ピシウム苗立 枯病  は種前	薬剤防除 1. 種子塗沫
褐斑細菌病      は種前 6月中旬～	汚染程度の低い種子を使用すれば、減収にいたる被害はほとんど生じないので、生産現場では薬剤による防除は必要ない。一方、種子生産ほ場では、種子消毒と発病株の抜き取り及び茎葉散布を組み合わせ、本病を総合的に防除する。 耕種的防除 1. 発病株の抜き取りを行う。 2. 二次感染は除草などのほ場管理作業により急激に起こるため、発生ほ場と共通の作業機械を使用する場合には、これらによる飛び込みやまん延に注意が必要である。 薬剤防除 1. 種子粉衣 2. 茎葉散布 (1) 6月中旬～7月下旬にほ場観察を徹底し、発病株をすぐに抜き取る。 (2) 抜き取り直後とその1週間後に茎葉散布をほ場全面に行う。
茎腐細菌病	耕種的防除 1. 種子生産ほ場では、無発生ほ場産の種子を利用し、一般栽培ほ場から隔離する。また、ほ場観察を徹底し、発病初期に病株を中心に4～5m四方を目安に抜き取り、二次伝染を防止する。さらに、農機具の洗浄や作業体系に留意する。 2. 一般ほ場では、健全種子への更新を行う。 薬剤防除 1. 茎葉散布
茎疫病	耕種的防除 1. 連作を避ける。

病害虫名及び 防除時期	防除方法及び注意事項
6月下旬～8 月下旬	2. 発病しやすいところでは耐病性品種を栽培する。 3. 排水をよくする。また培土処理及び高畦栽培は有効である。 薬剤防除 1. 茎葉散布 発病後から茎葉散布を行っても効果が得られないので、気象予報を 参考にして大雨が予想される場合には予防散布で対応する。
炭 疽 病  7月上旬～8 月中旬	耕種的防除 1. 輪作を行い、ほ場の清潔に努める。 薬剤防除 1. 茎葉散布
輪 紋 病  7月上旬～8 月中旬	耕種的防除 1. 輪作を行い、ほ場の清潔に努める。 薬剤防除 1. 茎葉散布
さ び 病  7月上旬～8 月中旬	耕種的防除 1. 輪作を行い、ほ場の清潔に努める。 薬剤防除 1. 茎葉散布 発生初期の防除が重要である。
菌 核 病  開花始後	耕種的防除 1. 連作を避ける。 2. 多肥栽培を避ける。 薬剤防除 1. 茎葉散布 開花始後7～10日目に第1回散布、その後10日毎に計3回散布す る。
灰色かび病	耕種的防除 1. 連作を避ける。 2. 多肥栽培を避ける。 薬剤防除 1. 薬剤耐性情報（詳細は261～277ページ参照） (1) チオファネートメチル剤耐性菌：確認されている。

病害虫名及び 防除時期	防除方法及び注意事項
開花始後	<p>(2) ジカルボキシイミド系剤耐性菌：広範囲で確認されている。</p> <p>(3) フルアジナム剤耐性菌：十勝管内の一部地域で確認されている。</p> <p>2. 茎葉散布</p> <p>(1) 開花始後7～10日目に第1回散布、その後10日毎に計3回散布する。</p> <p>(2) 菌核病との効率的な防除、また薬剤散布後の耐性菌の増加を抑制するための体系防除を実施する。</p>
落 葉 病	<p>耕種的防除</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 種子は厳選し、無病種子を使用する。</li> <li>2. 5～6年以上の輪作（豆類を除く）を行う。 被害はダイズシストセンチュウの併発により助長される。</li> <li>3. 輪作にはイネ科作物を組み入れる。</li> <li>4. 収穫後の茎葉処理は十分行う。茎葉を堆肥にする場合は完熟堆肥（1年間）とする。</li> <li>5. 耐病性品種を栽培する。</li> <li>6. 夏期に4カ月間湛水する。</li> </ol>
萎 凋 病	<p>耕種的防除</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 耐病性品種を栽培する。なお、レース3抵抗性品種を侵すレース4の発生が確認された。</li> <li>2. 発病ほ場産の種子は使用しない。</li> <li>3. 罹病残さ中の厚膜胞子は数年間にわたって生存し、感染源となり得るので、連作を避けるとともに、未発生地への罹病残さの移動を避ける。</li> <li>4. アカクローバ、シロクローバ、ササゲは保菌植物となる可能性が高いので注意する。</li> <li>5. 5年以上水稻を作付けすると、被害を回避できる。</li> </ol>

(イ) 害虫

病害虫名及び 防除時期	防除方法及び注意事項
タネバエ  は種前 は種時	<p>耕種的防除</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 有機質肥料の施用は、成虫を誘引し被害を多くするので、避けるのが望ましい。</li> <li>2. 牧草の跡地など、未分解有機物すき込み直後には種すると被害が多くなるので、分解が十分進んでからは種する。</li> </ol> <p>薬剤防除</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 種子粉衣・種子塗沫</li> <li>2. 播溝施用 播溝施用剤は種子に接するように処理すると、薬害を生ずることがあるので、施用位置に留意する。</li> </ol>
アブラムシ類 6月中～下旬	<p>薬剤防除</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 茎葉散布</li> <li>2. 地上液剤少量散布(25L/10a) 地上液剤少量散布の効果は、慣行散布と比較するとやや劣るものの実用性がある。少量散布に適するノズルを装着したブームスプレーヤーで散布する。</li> </ol>
マメホソクチ ゾウムシ 7月下旬～8 月中旬	<p>薬剤防除</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 茎葉散布 (1) 防除適期は、開花始と開花盛期である。 (2) 成虫は比較的温度の高い日中に活動するので、その頃を狙って散布すると効率的である。</li> </ol>
アズキノメイ ガ 7月下旬～8 月中旬	<p>薬剤防除</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 茎葉散布 開花始の7～10日後に薬剤散布を開始する。</li> </ol>
ツメクサガ 7月上旬～ 及び8月上旬 ～	<p>薬剤防除</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 茎葉散布 第1回発生：7月上旬～下旬、 第2回発生：8月上旬～9月上旬～</li> </ol>
ヨトウガ 6月中旬～ 及び8月中旬 ～	<p>薬剤防除</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 茎葉散布 第1回発生：6月中旬～7月中旬 第2回発生：8月中旬～9月中旬</li> </ol>



病害虫名及び 防除時期	防除方法及び注意事項
	【100 以上の場合】 寄主作物の作付けを避ける。
ハダニ類(ナミ ハダニ) 発生初期	薬剤防除  1. 茎葉散布 同一薬剤の連用を避ける。

(ウ) クリーン農業技術（病害虫防除関係分）（小豆）

○発生予測法の活用

- ・開花始めからの積算温度でマキバカスミカメの防除適期判断（前年発生ほ場において）

○発生モニタリングによる効率的防除

- ・ほ場観察による突発的に発生する害虫（マメアブラムシ等）の状況把握

○化学的防除の効率化

- ・灰色かび病の耐性菌出現防止対策として、系統の異なる薬剤のローテーション散布

○耕種的防除

- ・種子伝染性病害（褐斑細菌病など）の回避対策として、健全種子の利用
- ・萎凋病・茎疫病・落葉病対策として、抵抗性品種の利用
- ・透排水性の改善
- ・6年以上の輪作
- ・ダイズシストセンチュウ密度の低減対策として、輪作やアカローバの作付け
- ・ネグサレセンチュウ密度の低減対策として、えん麦野生種の作付け
- ・タネバエ被害回避対策として、有機物の前年秋施用

※注釈

- 開花始めからの積算温度でマキバカスミカメの防除適期判断（前年発生ほ場において）

薬剤散布適期は積算温度（開花始日から日平均温度の積算）が515～520日°Cである。この時期は、平年では開花始めから25～26日後である。散布当日の気温を加えるため、当日までの積算気温が500日°Cに達している場合、薬剤散布適期と判断できる。過去に被害発生が認められたほ場では、発生状況に応じて防除を実施する。

- ネグサレセンチュウ密度の低減対策として、えん麦野生種の作付け

えん麦野生種を休閒緑肥として栽培した場合、ネグサレセンチュウの抑制効果は高い。このため、ネグサレセンチュウによる小豆の被害軽減を図れる。えん麦野生種のは種量は、多い場合（15kg/10a）で効果が高い。